# ONE PIECE~最強の転生者

横山　龍也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ～ 最強の転生者

【Ｎコード】
Ｎ０８６４Ｚ

【作者名】
横山　龍也

【あらすじ】
神様のミスで死んでしまった主人公は、三つの漫画の力を授かりＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの世界に転生させられてしまった。とりあえず主人公がすることは・・・？

# プロローグ

「初めまして」

俺は誰かに声をかけられた。
ここはどこなんだろう・・・もしかして夢？
辺りは真っ暗で何も見えない。
そう思った瞬間、俺の前に光とともにやってきた女性。

「初めまして、私は全ての世界を統括する神です」

はぁ？

なんか突然やってきた女が変なことを言い出したぞ？

俺は何がなんだかわからない状況に混乱している。
しかし、そんなこともお構いなしにその女が話始めた。

「あなたは死にました」

はぁ？

本日二度目の混乱。

「あなたの人生はこれからでした。しかし私のミスであなたは死ぬことに・・・」

じゃ～お前のせいじゃねーか！

夢だからなのかうまく声が出せない。

「お詫びとしてあなたをほかの世界に転生させます」

いやいや、勝手に決めるなよ神様。

「そうですねぇ～どこが良いですか？」

どこがって・・・どんな世界があるかもわかんないのに良いも悪いもあるかよ。

「あなた・・・・無口ですか？」

何も言わない俺に対して神様はそんなことを聞いてくる。
だから喋れないんだって！
「むぅ～仕方ないです。ではルーレットで決めさせてもらいますね！」

勝手に決めるなよ！
てか、もうなんかルーレットみたいなの回ってるし・・・・。

ぐるぐるぐる～

てか多いな！
何だそのルーレット！

俺の目の前には１０００以上の項目が書かれたルーレット。
俺って昔から動体視力だけは良いんだよなぁ。

バンッ！

急に止まるルーレット。
そして、そこに書かれていたのは『ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ』。

え？ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥって・・・ワンピース？わんぴーす？
あの漫画の？？？？

「ではＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの世界に転生させますね」

また勝手に言ってやがる。無理に決まってるだろ・・・てか死んじゃうって・・・。

「あ、今のままじゃまたすぐに死んじゃいますね」

おぉ？
もしかして俺の心が通じたのかい？

少し嬉しい俺。

「では３つの力を授けます」

神様がそう言うと、また回りだすルーレット。

いや、それもルーレットで決めるのかよ！

「決まりました。

一つ目は漫画『めだかボックス』のキャラクターである球磨川　禊の過負荷（マイナス）の力【大嘘憑（オールフィクション）き】

。

二つ目は漫画『ＢＬＥＡＣＨ』のキャラクターである朽木　白哉が持つ斬魄刀【千本桜】。

三つ目は漫画『ＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ　―奪還屋―』のキャラクターである美堂　蛮がもつ【邪眼】。

この三つです！それでは転生～」

神がそう言うと俺は頭が痛くなり、気を失った。

黒瀬新一（くろせしんいち）。２１歳。

身長１７２ｃｍ

体重５５ｋｇ

容姿

黒髪で瞳の色も黒の日本人。

顔は上の中ぐらいのかっこよさ。

性格

優しく冷静沈着でおおらかなO型。しかしキレたら物凄く怖い一面も持つ。

能力

人並以上の運動神経とずば抜けた動体視力の持ち主。

神様から与えられた能力は【大嘘憑き(オールフィクション)】、【千本桜】、【邪眼】の三つ。

【大嘘憑き(オールフィクション)】

現実(すべて)を虚構(なかったこと)にするスキル。傷を負った現実そのものを「なかったこと」にして傷を負う以前の状態に戻したり、自分や他者の死、視力等の五感さえも「なかったこと」にできる(因果律に関与するスキルの為、自身の死に対しては自動で能力が発動し、死にたくても死ねない状態)。

【千本桜】

能力解放と共に刀身部分が目に見えないほどの無数の刃に枝分かれし、対象を斬り刻む。この刀身に光が当たることで桜の花弁を思わせるように見える。だが一方で、解放中は刀身が消えてしまうため、斬魄刀を通常の「刀」として使う事が出来なくなり、防御が手薄になるなどリスクも生じる。そのため力のある相手と接近戦を行う場合などには、あえて解放を行なわず「刀」のまま剣技で戦うことも多い。

解号は「散れ『千本桜』(ちれ『〜』)」。卍解時にも唱えることがある。

【邪眼】

相手に1分間の幻影を見せる。複数人、動物にかける事も可能。24時間以内に3回まで、同じ人間に1度しか通用しないという制限が有り（瞬きをしなければ同時に複数人にかける事も可）、この禁を破ると世界から消滅し他者の記憶からも完全に消滅する。

## プロローグ（後書き）

さてこれからどうなるのか・・・。
とりあえず好きなように書きたいと思います！

**マジで転生しちゃったよ・・・**

目が覚めるとそこはあたたかい布団の中だった。

やっぱり夢だったのか・・・？

新一がまだぼーっとする頭でそんなことを考えていると、急に現実に引き戻された。

「目が覚めたようだね」

女の人の声。

新一は身体を起こし、その声の主を確認した。

「・・・・!!」

見たことがある姿。

あれは・・・・・。

ノジコ？

なんと新一の目の前にいたのはＯＮＥ　ＰＩＥＣＥに登場するキャラクターのノジコだった。

やっぱり夢じゃない・・・？

それを確認するために、新一はノジコに話しかけてみる。

「ここは？」

「ん？ここはココヤシ村だよ」

やっぱりそうだ！

俺は本当にＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの世界に転生してしまったのだ。

「何も覚えてないのかい？」

ノジコは俺を心配しているようだ。

俺はとにかく情報を得ようと「あぁ」とだけ答えた。

「あんた、この家の前に倒れてたんだよ？本当に何も覚えてないのかい？」

覚えていないわけじゃない。

むしろ頭も覚醒してすっきりしている。あの神様とかいうやつのことも・・・・。

俺ははっきりと確信した。

本当にＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの世界に来たんだと・・・・。

それがわかっただけでいい。

まずは、今が原作のどの辺りなのかをノジコに聞いてみよう。

「ノジコは一人暮らしなのか？」

とりあえず今の状況を知るのなら、この質問でいいだろう。

「あんたまさか・・・」

「？」

「変なこと考えてんじゃないでしょうね？」

なっ！！！

質問を間違えたのか？勘違いされてしまった。

「あっはっはっは。冗ー談だよ！」

そういえばノジコってこんな感じだったっけ・・・。

「そ～だねぇ・・・。今はなかなか家に帰らない妹と二人暮らしかな」

妹・・・。

ナミのことだ！
ってことはまだルフィはナミを仲間にしていない・・・ってことでいいのか？

「そうなんだ。えっと・・・俺、行かなきゃいけない所があるんだけど船とかあるかな？」

俺は確信を得るためにそう言う。

「・・・・・・。

あんたがどうやってこの島に来たのかはわかんないけど、今はこの島からは出られないと思ったほうがいいよ」

「どうして？」

「この島はアーロンって海賊に支配されちまってるのさ。
アーロンはこの島に来る者も出る者も許さない・・・。だからこの島に船はないし、出て行こうとする気でもすぐに見つかって殺される」

やっぱりまだアーロンがいるのか。
ノジコの見た目は原作通り・・・ってことはまだルフィは東の海（イーストブルー）にいるってことか。
なら・・・俺のすることは、せっかくＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの世界に来たんだからルフィと旅でもするか！

やることも決まったし、ルフィを探しに行こう！
俺は短絡的にそう考えた。

「ノジコ、なんかお世話になったみたいで・・・ありがとな」

「いや、それはいいけど・・・まさかあんたこの島を出るつもりじゃないだろうね？」

ノジコの表情が変わる。

「いやいや、ちょっと散歩してくるだけだよ」

俺は適当にそんなことを言って家を出た。

いや～まさか本当に転生するとは・・・・。

ん？

みかんの木の下に何か落ちてる。

俺は悪いと思ったが、みかんの木の下に手を入れてそれを手に取った。

「これは・・・」

そこに落ちていたのは刀だった。

「もしかして・・・千本桜？」

そういえばノジコは家の前に俺が倒れてたって言ってたな。
この世界に来た時にみかんの木の下に転がっちゃったのか？

しかも・・・・。

なんのサプライズかは知らないけど、今の俺の格好は死覇装（しはくしょう）・・・
つまりは黒い着物だ。
さすがに隊首羽織（たいしゅばおり）は無かったが、まぁこの服装のおかげで刀を腰に
携えることが出来た。

俺は今アーロンパークに向かっている。
目的はもちろんアーロンをぶっ飛ばしてこの島を出て行くためだ。
あと、この3つの力がどれぐらい使えるか・・・ 俺の強さも知りた
いしな。
普通は修行とかして強くなるんだろうけど、2年とかかっちゃっ
たらルフィたちは魚人島に行ってしまうし・・・・。
ぶっつけ本番が俺のモットーでもある！

もしこれで死ぬことになってもそれはそれだ。

どっちみち一回死んでるらしいし、ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの世界で楽しむためには強さがいる。

アーロンを倒せたらそこそこ強いだろ！

とりあえず今のゾロやサンジより強いってことになるしな。

そんなことを考えながら歩いているが、まったくアーロンパークにたどり着かない。

「・・・・・・」

どこにあるんだ？

たしかココヤシ村から近かったような・・・。

「あ～ぁ、空でも飛べる能力にしてほしかったよ」

すでにやる気をなくしてる主人公・・・。

「てかなんでココヤシ村からなんだよ！こういうのっていきなりルフィ発見！とかなるんじゃねーの？」

「あ」

そんなことを言っていたらアーロンパークが見えてきた。

「やべぇ・・・・緊張してきた」

三つの力を貰い最強かと思われた主人公だったが、心は一般人な新一だった。

「やっぱ死にたくねぇーーー」

**マジで転生しちゃったよ・・・（後書き）**

結局新一はアーロンと戦うんですかねぇ？

実際に転生したら絶対戦わないと思います。

だってアーロンとか恐すぎじゃん？笑

## 新一、初めての戦い

とうとう来てしまった。

新一は今、アーロンパークの入り口前に立っている。

「行くか・・・」

意を決してそう呟くと扉わゆっくり開く。

おじゃまします～す・・・。

心の中でそう言う。

口には出さないぜ？

だってかっこ悪いじゃん！

「あぁん？」

扉を開けた先にはアーロンがこちらを睨んでいる。

恐ぇぇぇぇぇぇぇ

「なんだてめぇは？」

さらに声を荒げて言うアーロン。

まぁ、いきなり嫌いな人間がやってきたら機嫌も悪くなるだろう。

そう考えていると、モブキャラである魚人が新一に近付いてきた。

本来ならルフィたちに一瞬、一コマで瞬殺される程度の奴らだ。

でも実際見たらめっちゃ恐い！

しかしそんな思いを悟られてはならないと、俺は強気な態度を取る。

「お前らがこの島を支配してるアーロン一味か・・・・悪いけどお前らを潰させてもらう」

言ったーーーーーーー！

うっわ、凄い顔でアーロンに見られてる・・・。

でももう後には引けない。

俺はゆっくりと千本桜に手をかけて、そして刀を抜い・・・・・・・・

抜けねぇ！！

あれ？？

そういえば刀って素人が抜くのは難しいんだっけ？

やたら堅いんだけど・・・。

やばい！このままじゃめっちゃかっこ悪いじゃん！

くっそ～こんなことなら来る前に練習しとくんだった・・・。

ぶっつけ本番が仇になってしまったよ。

ん～もしかして角度とか関係あるのかな？

俺はアーロンたちにバレないようにそっと刀を引き抜こうとした。

カキン・・・・。

お？

なんかわかんないけど抜けた！！

「そんな物騒なものを持って何するんだ？」

アーロン一味のモブキャラたちが新一に近付いてきた。

えっと・・・・確か解号は・・・・。

「散れ・・・・千本桜」

新一がそう言うと千本桜の刀身が消えた。

「・・・・刀身が・・・・消え・・・・」

モブキャラやアーロンたちも驚いている。

その瞬間、モブキャラたちが千本桜によって斬り刻まれた。

うっ・・・。

予想以上にグロい・・・・。

俺の周りではモブキャラたちが血塗れになって倒れていく。

てか勝手に斬り刻まれたけど・・・ まぁ、初めてだしコントロールできないのも当然か？

あ、ここはかっこつけるとこじゃね？

「俺はアーロンに用があるんだよ。雑魚は引っ込んでな」

言ってやったぜ！

ってかめっちゃアーロンが睨んでる。

「てめぇ・・・・ よくも同胞を・・・」

アーロンはそう言いながら座ってたイスから立ち上がった。

で、でけぇーーー！！

俺の倍はあるんじゃないか？

そう思わせるほどアーロンの身長はでかい。

「アーロンさん・・・あんたは座っててくれ」

お、ハチ、チュウ、クロオビの三人の幹部が出てきた。

痛ぇ・・・・・。

俺は三人の幹部に瞬殺された。

「シャーッハッハッハ。どうやら口だけの男だったようだな」

アーロンが笑っている。

「さてこの男どうするか・・・」

クロオビは腕を組みながら言う。

「・・・殺せ」

アーロンが不敵な笑みを浮かべながら新一を見ている。

「この下等種族は俺の同胞を亡き者にした。こいつは殺して、捨てとけ」

アーロンのその言葉を聞いたハチは倒れている俺に近付き「ニュ～、何か言い残すことはあるか？」と聞いてきた。

俺は薄れゆく意識で「雑魚が・・・」とだけ言った。

雑魚はどう見ても俺の方なんだが、最後までかっこよくいたいと思ったために出た言葉だった。

ザクッ・・・

ハチは持っていた剣で新一の身体を突き刺した。

「シャーッハッハ、少しは気分もすっきりしたぜ。

だが、まだだ！このままココヤシ村にでも行って、あと2、3人ぶち殺してやるか・・・」

「チュ、それはいい考えだ」

そしてアーロンたち４人はスタスタと歩きだした。

あれ？

生きてる・・・。

新一の意識が戻る。

そうか！大嘘憑きが発動したんだ！

なるほど、なんとなくだけど発動の仕方が理解できた。

右手には千本桜もある。

「散れ・・・千本桜」

バシュウウウウウ！！

「！！？」

千本桜がハチ、チュウ、クロオビを斬り刻む。

そして俺はゆっくりと立ち上がる。

いきなり3人が血だらけになって倒れたので、アーロンは何が起きたのかわからない。
だが、後ろに感じた人の気配に驚愕した。

「どういうことだこりゃあ」

アーロンはキレた時の目で新一を見た。

めっちゃ恐いけど・・・ やっぱここは括弧つけるべきだろ？

『大嘘憑き（オールフィクション）！』

『俺の絶命を・・・ なかったことにした！』

マネさせてもらったよ球磨川。

でもここからは俺の戦いだ。アーロンとの一騎打ち。

この戦いで力をコントロールしてみせる！

## 新一、初めての戦い（後書き）

いや～次はアーロンとの戦いですが、どんな戦いになるのか。

ルフィたちはいつ登場するのか。

まったくわかりません！笑

長い目で見てやってください。。。

## 隙だらけの戦い

【そういえば卍解ってどうやるんだ？
確か卍解取得には本体の具現化と屈服が必要だったはず・・・。

卍解とは・・・。

本体の具象化と屈服が必要。

斬魄刀解放の二段階目。始解同様に変形、特殊能力の付加などが伴うが、基本的に始解の能力・特性を強化したものである場合が多い。戦闘能力は一般的に始解の５倍から１０倍と言われており、その強大さ故に斬魄刀戦術の最終奥義とされている。
また、卍解修得者は、斬魄刀の名を呼ぶ事なく始解することも可能。卍解に至るのは才能のある者でも１０年以上の鍛錬が必要とされ、卍解修得者は例外なく尸魂界の歴史に永遠にその名を刻まれる。具象化とは、対話の際に死神が精神世界に赴くのではなく、斬魄刀の本体を死神のいる世界に呼び出す事。卍解に至るのが困難とされる理由は、具象化に至るのが困難なためである。具象化した斬魄刀の本体を倒す事を斬魄刀を屈服させると言い、これに成功して初めて卍解を修得できる。

千本桜・・・ 卍解形態。

千本桜景厳（せんぼんざくらかげよし）

斬魄刀を地面に向けて落とすと同時に解放。落ちゆく斬魄刀は地面に吸い込まれるように沈み、直後、所持者の背後から大量の巨大な刀の刀身が生え、それが塵のように舞って散る。　「目に見えないほど小さい千本の刃」が能力である千本桜の刃がさらに増え、総数・億を越すほどの膨大な刃を出現・操作する。

見えない刃で斬りつける本来の用途以外にも、刃を圧縮して殺傷力の高い剣を造り出したり、相手を無数の刃で球状に囲んで逃げ場を無くしたりと非常に応用が効く。

この千本桜も同じようにしなきゃダメなのか？

それだと才能ある者でも１０年はかかるって言われてるんだから無理じゃね？

でも始解は解号を言っただけで発動させることが出来た。

もしかしたら卍解も意外と簡単にできるんじゃないか？

新一は刀の切っ先を地面に向けて「卍解！」と言って千本桜を地面に落としてみた。

キンッ・・・。

新一が落とした千本桜は重力に逆らうことなく地面に落ちた。

「やっぱり無理かぁ・・・」

いや、もう一回やってみよう！
次はもっと集中して、よくわかんないけど力を入れる感じで・・・。

新一はぶつぶつと何か言いながら千本桜を拾い、何に集中しているのかわからないが、とにかく集中した。】

「どういうことだこりゃあ」

アーロンはキレた時の目で新一を見た。

『大嘘憑き（オールフィクション）！』

『俺の絶命を．．．なかったことにした！』

同胞がやられてキレてしまったアーロン。

新一を睨みながら体に力を入れる。

「鮫（シャーク）．．．．．ＯＮ・ＤＡＲＴＳ（オン・ダーツ）！」

アーロンはそう叫ぶと新一を目掛けて頭から突進してきた。

「はっや．．．．！！」

ザクッ！！

アーロンのノコギリのような鼻が新一の心臓を突き刺す。
鼻に突き刺さった新一を地面に叩きつけるが、新一は「大嘘憑き（オールフィクション）」と言って立ち上がった。
新一はアーロンに対抗しようと千本桜を解号させようとするが、アーロンの鮫（シャーク）・ＯＮ（オン）・ＤＡＲＴＳ（ダーツ）が速すぎて反撃できないでいた。
アーロンも千本桜の力を見ているので警戒しているのだろう。攻撃の手を休めずに新一を即座に、何度も殺していく。

しかし、何度殺しても立ち上がる新一にアーロンは苛立ちを隠せない。

しかし同時に、新一がなんらかの理由で死なないことを確信するアーロン。偉大なる航路（グランドライン）出身の彼は新一が“悪魔の実”の能力者であると推測した。
不死身・・・・そんな能力があるのかと疑問も感じたが、実際に死なない新一を前にしてそんな疑問は無意味だと悟った。

「死なないということはわかった・・・だがこの俺が下等種族である人間に負けるわけがない」

アーロンはそう言うと新一を掴んで持ち上げた。
それと同時に新一が持っている千本桜を奪い、海に沈めた。

「死なないというのならこのまま殺さずに生かしてやる！」

新一がアーロンの言葉を聞いたのはここまでだった。アーロンが新一の首に手刀を入れて気絶させたのだ。

【良し！卍解は出来た。

あとは白帝剣（はくていけん）にしてみよう。

新一は卍解が出来た喜びからなのか、軽い感じでやろうとしていた。

終景（しゅうけい）・白帝剣（はくていけん）。

千本桜景厳の全ての刃を圧し固め、一振りの究極の剣にした形態である。

「終景・・・白帝剣！」

シュウウウウウウ・・・】

アーロンが新一を持ち上げてしばらく経った。

（どうやら復活しねぇようだな）

新一が復活しないことを確認するとアーロンの口角が上がる。

「シャーッハッハッハ、これで安心だな。このままどこかの土にでも深く埋めれば復活してもまたすぐに死ぬだろう」

どうやら無限に繰り返す死を考えているようだ。

確かに大嘘憑（オールフィクション）きでもこれなら復活できないだろう。

まぁ、土をなかったことにすれば助かるかもしれないが、さすがにそれは新一には出来ないだろう。

アーロンは新一をとりあえず地面に叩きつけ、指定の椅子であろう場所に座る。

「シャーッハッハッハ」

「・・・一分」

パキ・・・

パキパキパキ・・・・・・・・

パリーン！！

ザクッ・・・・。

「・・・！！？」

今までアーロンがいた世界がまるでガラスのように砕け散り、白帝

剣でアーロンの腹部を刺している新一がアーロンの目に映った。

「お前が今まで見ていたのは幻だ・・・。残念だったな、アーロン！」

俺はまんまとアーロンを出し抜いたことでテンションが上がり、クールなキャラを演じていた。

ふっふっふ・・・決まった。

「ごふっ・・・下等種族が・・・一体いつから・・・」

アーロンは口から血を吐きながらも聞いてきた。

「お前がキレて俺を見た時さ・・・」

俺のその言葉を聞いてアーロンは倒れた。

## 隙だらけの戦い（後書き）

なんかアーロンのキャラが崩壊しすぎ？でしたね・・・泣

説明も多くてすみません。でもお気に入り登録が多くて作者は嬉しいのです！笑

テンションだけで書いてる感じもありますが・・・こんな作者でもよろしくです！！

## 新たな力

勝った・・・・??

アーロンに・・・

「勝ったんだーーーーー!!」

俺は嬉しすぎて思わず叫んでしまった。
これで俺もＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの世界の住人としてやっていけると思った。

そんなに甘くはないのにね?

ドゥルルン!

「？」

突然目の前が真っ暗になった。

え？

なになに？？

「この世界を大いに楽しんでいるようだね」

新一の目の前に現れたのは、この世界に転生させてくれて三つの力までくれた神様だった。

「え？な、何？」

いきなりのことで動揺する新一。

「やぁやぁ新一くん。実は君に言い忘れたことがあってね・・・」

言い忘れたこと？

「何ですか？」

俺は恐る恐る神様に聞いてみる。

「実は君がこの世界で原作キャラを倒すたびに新しい力をあげる！・・・っということを言い忘れたんだよ」

・・・・新しい力？

おおおおおおおおおお！！

めっちゃラッキーじゃん！

ってことは俺はもっと強くなれるってこと？

「じゃ、じゃ～そうですねぇ・・・」

俺はどんな力にするのか悩んでいる。

「あ、ちょっと待って！」

「？」

神様は考えている俺の横に巨大なルーレットを出した。

「え・・・まさか・・・・」

「そう！最初がルーレットだったんだからこれからもそうしようと思って」

・・・やっぱり？

人生はそんなに甘くないと思った新一。

がっかりとしている新一を無視するかのようにルーレットが回りだす。

くっそー！！

これじゃ～またどんな力を貰えるのかわかんないじゃん！

最初に貰った力は俺も原作読んでたからなんとか使えたけど・・・・・全然知らない漫画とかになったらどーすんだよ。

俺はぶつぶつと文句を言いながらもルーレットが止まるのを待った。

力が貰えるのは素直に嬉しいしね。

ダンッ

どうやらルーレットが止まったようだ。

「決まったね！では四つ目の力は・・・」

今さらだが俺にはルーレットで何が出たのかはわからない。
というのも書いてる字が読めないのだ。

いや！

決して俺が日本語が読めないほどの学力ではないぞ？
字が日本語ではないのだ。

「四つ目の力はゲーム『ポケットモンスター』の技から・・・」

え？

ポケットモンスター？？

って・・・ポケモン！？
もう嫌な予感しかしないよ・・・。

「【はねる】に決定しました！！」

ギャヤヤヤヤーーーーーーーー！！

【はねる】

はねるだけで何も起こらない。ポケモンシリーズ最弱の技。

せめて・・・・・

せめて・・・・・ほえるでしょーーーーがぁーーーー！！

「じゃあ、帰るね！」

そう言って神様はどこかに消え、新一は涙目でアーロンパークを見つめていた。

トントン・・・・・・。

トントントン・・・・・・・・・・。

「・・・・ とりあえずココヤシ村に帰ろう」

新一は何回かはねた後、ココヤシ村に向けて歩きだした。
その道中で千本桜を鞘から抜く練習をしようと決意したのは言うまでもない。

新一がアーロンパークの入り口に差し掛かった時、誰かの叫ぶ声が

した。

「おーーーい、お前！どけよ！」

ん？

子どもの・・・声？

「俺はアーロンを殺しに来たんだ！」

「俺の父ちゃんはアーロンに殺されたんだ！どかないとお前だって殺すぞ！？」

俺は入り口の扉から外の様子を見てみた。

あぁ。

そういえばあんな子どももいたなぁ。

俺が見たのは黄緑色のニット帽にオレンジ色のTシャツ。そのTシャツには『今』と書かれている。

あれは・・・・ナミ！

その少年の目の前にはバックを肩に担いだナミが立っていた。
少年は剣を両手で持っており、涙を流し、震えながらナミに向かって叫んでいる。

え・・・と、ここにナミがいるってことはもうルフィはこの島に向かっている??
しかもウソップやゾロは島に着きそうなんじゃないか?
俺はそんなことを考えながらも今後の展開を必死に思い出した。

（原作通りなら！）

その子どもにイラッとしたのか、ナミは胸元から組み立て式の木の棒を取り出してその子どもを殴ろうとする。

パシ・・・。

「やめなよ」

なんとか振り上げられた木の棒を掴むことに成功した。

てかめっちゃ痛ぇ・・・。やっぱりナミは力があるなぁ・・・・。

殴られずにすんだ子どもは目を見開いて俺を見ている。

「あんた・・・誰？」

ナミが俺の方に振り向いて言う。俺は木の棒を離してナミと向き合った。

「魚人たちなら俺が壊滅させたよ」

いきなりの俺の言葉にナミは動揺しているようだ。

「はぁ！？」

やはり信じられないのだろう。

まぁ、当たり前か・・・。

「信じられない？」

「あ、当たり前よっ！！」

だろうね。だけど・・・・

「ならこの扉を開けて見てみなよ？」

「・・・・・」

ナミは何故かそこから動かない。

先に動いたのは少年だった。
少年は泣いていた顔もすっかり晴れ、扉に向かって走って行った。
バンッと開かれた扉を少年とナミは無表情で見ている。
二人の目に飛び込んできたものは血だらけになり、倒れている魚人の数々。
その中にはアーロンもいた。

「うそ・・・・」

ナミはその光景を見てうっすらと目に涙を浮かべている。
少年は俺たちの方に振り返り、笑顔で言葉にならない声を出していた。

先ほどまでまるで怒った顔をしていたナミがまだ信じられないという言葉を発しながら顔に手を当てて泣いている。

今思ったけど・・・・・

実物のナミめっちゃかわいいじゃん！！

俺はその場に不相応な思いを押し殺して・・・・・ないけど、なんとか堪えてナミに話しかけた。

「泣いてるところ悪いけど、あんたにいくつかのお願いがあるんだ」

「え？」

あ、今思い出した・・・あの少年の名前・・・チャボだ！！

## 新たな力（後書き）

最後はどうでもいいですよねぇ～。笑
でもなんとなく入れたかった！

いやぁ～やっと？原作に介入出来そうです。。。
まぁ、結構早めでしたね・・・。
次はルフィ出せるかなぁ？
それは、次章のお楽しみで！！

## ナミへのお願い

「俺、みんなに伝えてくるよ！」

そう言って少年・・・チャボは走って行ってしまった。

チャボを笑顔で送り出した俺にナミは話を戻すように言う。

「本当にアーロンたちをあんたが一人で？」

まだ信じてなかったのか・・・。

「あぁ、そうだよ」

「そっか・・・・・・ありがと」

最後のお礼の言葉は小さく言ってたけど聞こえていたぜ。

俺はそんなナミに微笑む。

ナミはそんな俺を見て「な、何よ？」と強めに言っていたが、怒っていないことはすぐにわかった。

「それで・・・私に頼みって？」

あぁ、そうだった。
俺はナミにいくつかの頼みがあると言ったんだ。

「まず一つ目は、海軍を呼んでくれないか？」

俺はこの世界に来たばかりで海軍への連絡方法もわからないし、アーロンたちをこのまま放置しておくわけにもいかないだろう。

「もちろんあんたがアーロン一味ってのは黙ってるからさ」

俺はそう付け足すと、ナミは「わかった」とだけ言った。
とりあえず俺の頼みとやらを全部聞きたいのだろう。
しかしその時、４人の男が現れた。

「？？」

「・・・・」

俺たち2人の前に現れたのはあの海軍大佐のネズミだった。

こいつかぁ～ちょうど良かった！

「チチチチ・・・・・今日は何というラッキーデー。戦いの一部始

終を見させてもらった」

え？

こいつ見てたの？
あ、そうか・・・原作ではアーロンに金貰いにきてたんだっけ。その後でナミの家に押しかけるんだったか？

「まぐれとはいえ、貴様のような名も無い奴に魚人どもがよもや負けようなどとは思わなかった」

うん、大正解！
完全にまぐれでした。

「だが、おかげでこのアーロンパークに蓄えられた金品は全て私の物だぁ！
貴様の手柄、この海軍第１６支部大佐ネズミが貰った！」

うわぁ～なんか凄い興奮して喋ってるよコイツ・・・・。

「ナミ。一つ目を取り消して、コイツをぶっ飛ばしてくんね？」

俺のその言葉にナミはすぐにＯＫした。
ナミもムカついてたんだなきっと・・・。

「お、お前ら・・・俺に手を出してみろ・・・・ただじゃすまないからな！」

え？

まだ何もしてないのに、ナミが武器出しただけでビビってるよ・・・。本当に大佐か？

ドガッ！

あ。

バキッ！

デュクシュ！

ガンッ！！

ナミは間髪入れずにネズミ以下３人をボコボコにした。

「これでいい？」

うわぁ～ちょー恐ぇぇぇぇぇ！

「あぁ、十分だよ」

俺は冷静を装ってそう言う。

そしてナミは倒れたネズミの髭を引っ張りながら。

「あんたたちはこれから魚人たちの片付け！それとゴサの町の復旧に協力！
アーロンパークに残った金品には一切関与しないこと！あれは島のお金なの！わかった？」

ナミがそう言うとネズミは「い、痛い痛い・・・ 言う通りにします」

と言ったので、ナミはネズミの髭を離した。

「覚えてろよ黒服の男！」

えぇ？

俺じゃないだろ！ナミだろ！

と心の中で思ったが当然口には出さない。

「お前のことを調べ上げてやるからな！」

あ、このままじゃルフィが賞金首にならない？

そう考えた俺は、ネズミの耳元で「俺たちは海賊だ。船長はモンキー・D・ルフィ。麦わらの一味だ」と小声で言った。

それからネズミは何かを叫びながら俺たちの前からいなくなったが、俺はもうどうでも良かったためにほとんど聞いてなかった。

さてと・・・・。

「急な邪魔が入ったけど、続けるぜ？」

「え？あ、うん」

ナミは思い出したかのように俺の方に体を向き直した。

「えっと、二つ目はあんたが麦わらの一味に入ること」

「！！？」

ナミはなんであんたがそんなこと・・・とでも言いたいのだろうが、俺はすかさず次の頼みを話す。

「三つ目は俺について何も聞かない」

「・・・・・・っ」

この言葉でナミは俺に言いたいことを止めたのだろう。開こうとした口を無理矢理閉じた。

「最後に・・・・俺は麦わらの一味に入りたい。そこで、ルフィにあんたが口添えしてほしい」

「どうして・・・」

ナミが何か言おうとしたので、俺は「俺について何も聞かない」と念を押した。

「ダメな頼みはあるかい？」

俺がそう言うとナミは少し考える素振りを見せたが、すぐにすべてを了承してくれた。

「あんたには大きな借りがあるしね」

そう言ってナミは右手を差し出した。

「私、ナミ！ルフィの仲間になるなら、私とも仲間ってことよね？」

俺はナミの右手を取り・・・。

「黒瀬　新一。よろしくな・・・ナミ」

「シンイチ？なんか呼びにくいわね・・・・」

そう言うとナミは俺に背を向けて歩き出した。

「何やってんの？早く村に行くわよ、シン！」

どうやら俺はこの世界でシンと呼ばれることになるんだろうなぁっと思いながらもナミと一緒にココヤシ村に向かった。

その道中で「ココヤシ村っていう村があるんだけど～」と、ナミは嬉しそうにココヤシ村について俺に教えてくれた。

まぁ、ココヤシ村は知ってるんだけどなぁ～っと思いながらも、ナミから聞く話は原作にはなかった話などもあったので新鮮で退屈せずに歩けた。

しかし、時折左肩を見て悲しい顔をしていた。

そっか・・・・俺がアーロンを倒したことによって、ナミはこの左肩をナイフで刺さない。

一生消えない刺青がナミを苦しめるのなら・・・・・。

「ナミ、ちょっと目を閉じてくれない？」

「え？なんで？」

まぁ、いきなり目を閉じては不自然だったか？

「いいから5秒だけ閉じて」

ナミは少し疑い「変なことしないでしょうね？」と言いながらも目を閉じてくれた。
目を閉じたのを確認した俺はナミの左肩に触れた。
ナミは一瞬身体を固まらせたが、俺が開けていいよと言うと安心した顔を見せた。

「これ・・・・一生消えないのに・・・・・・えっ！？」

目を開けたナミは自分の左肩を触ろうとして動きが止まった。

「な、なんで？？刺青が・・・・」

そう。
みんなもご存知の『大嘘憑き（オールフィクション）』だ。
でもまだナミには言わないけどね！

「これ、シンがやったんでしょ？」

ナミが掴みかかるんじゃないかと思われるほどの勢いで近付いてきたので、俺は「さぁね」とはぐらかした。

このやりとりはココヤシ村に着くまで続いたが、俺は最後まで言わなかった。

## ナミへのお願い（後書き）

なんか全然進んでないような・・・・笑
なので1日に出来るだけ更新したいと思います！！
みなさん、よろしくです♪

## 道化師？

ん・・・。

「あ、ここは・・・」

一人の男が深い眠りから覚める。

「アタシん家だよ」

気がついた男に女が話かけた。

「へ？へぇ？」

「気がついた？」

「あ、お前は・・・」

「アタシはノジコ、ここでみかん作ってんの」

どうやらノジコとウソップのようだ。
ゴサの町で魚人と遭遇したウソップはノジコを助けるために魚人と戦おうとしたが、逆にノジコに気絶させられて今に至る。
原作ではここにゴサの子ども・・・チャボもいたが、ここにはいない。

「おーーーーーい、みんなぁーーーーー」

ウソップとノジコが話していると村中に聞こえる声で子どもが叫んでいる。
村から離れた位置にあるノジコの家にも声が届いているのがその証拠だろう。

「な、なんだ!?」

ウソップが何事かと立ち上がって窓から外の様子を見ている。
もちろんここからは何も見えないのだが・・・。

「・・・・?」

ノジコも村の方から聞こえる元気な声に、違和感と興味からか耳を澄ませている。
アーロンがこの島に来てから、誰もこんな元気で嬉しそうな声を出したことがないのだろう。

おぉぉぉぉぉぉぉ!!!!

村の方からまるで地響きが起きるのではないか？というほどの村人たちの声が聞こえる。

何かあったのか・・・・ノジコはそう考え、急いで家を出て村に向かった。

その行動を見ていたウソップもノジコに次いで家を出る。

「何かあったの？ゲンさん！？」

ノジコは村に着いてすぐに近くにいたゲンゾウに聞く。

「おお、ノジコ！！」

ゲンさんもなんだか嬉しそうな顔をしてノジコは見た。

「聞いて驚くなよ？」

「な、なに？」

ノジコは何が起こっているのかわからないため、不思議そうに聞く。

その時、ノジコの後を追っていたウソップも村に到着した。

「あのアーロン一味が壊滅したそうだ！！」

「えぇ！？」

ノジコは信じられないと言った感じでゲンさんを見ている。

「我々も今この子から聞いたんだが・・・」

そう言ってゲンさんはチャボを見た。

「あの子が？」

ゲンさんの目先にいる子どもをノジコも見た。

「でも、どうして・・・」

ノジコがそう呟くと、チャボはここにいる全員に聞こえるように「俺、見たんだ！魚人が血だらけで倒れてるとこを！！」と言う。

村人もチャボの言葉を信じていないわけではないが、全員で確認しに行くことにした。

一人一人が念のため武器を持ち、今まさにアーロンパークに向かおうと一歩踏み出したその時、アーロンパークへの道から歩いてくる２つの人影が見えた。

「ねぇ！どうやってあの刺青を消したのか、いい加減教えなさいよ！」

ふぅ～・・・。

ナミってしつこいんだなぁ・・・・・。

さっきまで嬉しそうに昔話してたじゃないか。

ん？

ココヤシ村に人が集まっている。

あぁ、チャボがみんなに知らせたんだった。

俺はナミの質問を回避しようと「ココヤシ村に人が・・・・」とナミに話しかけた。

「わかってるわよそんなこと！」

見ればわかる。っというようにナミが言う。

ココヤシ村に足を踏み入れた俺たち2人に村人たちが走って寄って来る。

俺たちってかナミにだが・・・・・。

ノジコだけは「アンタ・・・」と俺に気付いてくれた。

村人たちはナミに魚人のことについてとかいろいろ聞いている。

魚人たちの壊滅がナミの言葉によって確定したので、村人たちは涙を流しながら喜んでいる。

今夜から騒がしくなりそうだ。

俺が少し離れたところからナミや村人たちを見ていると、アーロンパークの方から大きな音がした。

しかし、村人たちは特に聞こえていなかったのか気にするような素振りは見えない。

俺も特に気にしなかった。

ん？

いつの間にかウソップが俺の横にいた。

近くで見るとやっぱり鼻が長い。俺は衝動的にウソップの鼻を掴む。

「って何してんだテメーーー！！」

おぉ！ウソップの初ツッコミだ。

それからもウソップにガミガミ言われたが、俺は愛想笑いで受け流す。

「ナミーーーーーーーー！！」

突然聞こえた大きな声に今まで騒がしかった村人たちも静かになった。

「ルフィ！！」

俺の隣にいたウソップが声の主に反応して言った。

生ルフィだ！！

俺はルフィを見て感動したが、顔には出さずにルフィを見ていた。

それから数時間が経ち、夕方になったココヤシ村にはアーロン一味の壊滅の知らせを聞いた島中の人間が集まって宴会をしている。
ルフィたちも何がなんだかわからないのに宴会に参加しているところを見るとさすがと言うべきか・・・。

もちろん、ココヤシ村に到着したルフィの仲間のゾロは“鷹の目のミホーク”との戦いでついた大きな傷の手術。
そんなゾロも手術終わりの体で宴会に参加していた。

「ルフィ！」

俺は生ハムメロンを探していたルフィに声をかける。もちろんナミも一緒だ。
ルフィは両手に肉を持ちながら「ん？誰だオメー？」と俺を見てそう言う。

「俺をルフィの仲間に入れてくれないか？」

単刀直入に言った。

ルフィが俺をまじまじと見ている。

・・・・肉を食いながら・・・。

「ルフィ、私からもお願い！シンは私たちを救ってくれたの！悪い奴じゃないってことは私が保証するわ！」

俺の横にいたナミがそう付け足してくれた。

ルフィは食べている肉をゴクリと飲み込むと「お前シンって名前なのか～！いいぞ！」と言った。

軽っ！！

さすがルフィだ。

こうしてルフィたちの仲間になった俺は後々ゾロたち3人も紹介された。

ウソップには「もう鼻を掴むなよ？」と言われたが、それは約束できない。

そして数日後の朝、ココヤシ村の村人たちに見送られて麦わらの一味は出港することになった。
地味にヨサクとジョニーも挨拶していたが、俺はそういえばいたんだ・・・という感想しか持たない。
メリーに感動しすぎて忘れてたよ。

もちろんあの宴会の時にノジコとも話をした。
俺を助けてくれた？お礼の言葉とある約束をノジコと話したのだ。
それからナミが俺のことを村人たちに話したことによって、宴会は俺にお礼を言いたいという人たちで溢れかえった。
おかげでほとんど寝れずに今に至るわけだが・・・・。

「船を出して！！」

そんな中で不意に響いたナミの声に、意味が分からないながらも俺たちは船を出した。

村人達に礼を言わせる事も、また別れを言う事も無く行ってしまうのかと、船に向かって走り出すナミを皆が止めようとするが、彼女は人々の間をすり抜けると一気にゴーイングメリー号に飛び移る。
そしてTシャツの裾を上げ、村人＋ジョニー・ヨサクの全員から盗んだ財布を甲板に落として見せた。

「皆、元気でね」

「やりやがった、あのガキャ――――ッ！！！！」

ここは原作通りなんだと思うと感動してしまうシン。

そんなナミに泥棒猫とか、財布を返せとか、そんな言葉に混ざって、いつでも帰って来い、元気でやれ、そんな風に村人たちは叫んでいる。

彼らもまた、それがナミらしさであり、これから楽しんで欲しいと思うからこそそう言ったのだろう。

ナミは満面の笑みを浮かべ、叫ぶ。

「じゃあね、皆！！！！行って来る！！！！」

船から見たアーロンパークは粉々に崩れていた。

そう思った後ろでルフィたちが「あれ、魚人たちの家だったんだな」などと話している。

もしかして原作とは違う場所のアーロンパークに船ごと突っ込んだのか？と思ったが口には出せないよな？

そして、ココヤシ村出港から数日が経った。

俺たち麦わらの一味は“偉大なる航路（グランドライン）”を目指し、船を進めている。

ウソップは後ろの甲板で“タバスコ星”とやらを開発中だし、サンジはナミが故郷から持ってきた蜜柑の木の警備をしている。

どうやらルフィがその蜜柑を盗もうとしたので警備しているようだ。

ナミは買ったばかりの新聞を読み進め、ゾロは甲板で一人、昼寝の体制に入っている。

俺は特にすることもないので、アーロンパークからの帰りの道中に出来なかった千本桜の出し入れの練習を誰にも見つからない所でし

ていた。

ん～やっぱりあれはまぐれだったか・・・・。

全然抜けねー。

その時、「「「「「あああああ――――っ！！！！」」」」」という声が船に響き渡った。

俺はルフィたちの所に駆けつけると、みんなが見ている紙に視線を落とした。

「なっはっは！見ろ、シン！俺たち“お尋ね者”になったぞ！」

そこには2枚の手配書があった。

モンキー・D・ルフィ
（麦わらのルフィ）

懸賞金：３０００万ベリー

これは原作通り・・・あとの１枚は・・・・・。

クロセ・シンイチ
（道化師）
懸賞金：２７００万ベリー

おぉ！！
俺も賞金首に！！
でも道化師って・・・・。

おそらくアーロンとの戦闘を見ていたネズミのせいだろう。

サンジとウソップは新入りがいきなり懸賞金がついた俺に納得がいかないようだったが・・・。
ウソップはルフィの手配書に写っている自分の後頭部を発見して満足しているようだった。

俺たちが手配書で騒いでいると、ゾロが「おい、島がみえるぞ」とナミに言った。

「あの島が見えてきたってことは、偉大なる航路(グランドライン)に近ずいてきたってことね」

ナミはルフィたちに説明するように言う。

「あそこには有名な町があるの。
『ローグタウン』・・・・別名、“始まりと終わりの町”。かつての海賊王、ゴールド・ロジャーが生まれ・・・・そして処刑された町。
・・・・・・・・・・・・行く？」

ルフィはそのナミの言葉に「行く！！」とだけ言った。

そして俺たちはローグタウンに上陸する。

## 道化師？（後書き）

なんかあれよあれよと言う間にルフィの仲間になってしまいました。笑

今回はローグタウンまで書きたかったので少し長く、そしてちょっと薄くなってしまいました・・・泣

でも、今の俺ではこれがベストです！

シンの感情ももっと入れたかったのですが・・・。まぁいいでしょう！笑

あ、これから新一のことはシンに統一させますね。。。

でも、黒瀬　新一という名前は忘れないであげてください！笑

## 海軍大佐スモーカー

「うっひょー！でっけぇ町だなー」

ローグタウンに上陸した俺たち6人は大きな門の前にいる。

「かつては偉大なる航路（グランドライン）へ向かう海賊たちで賑わった町よ。必要なものな何でも揃うわ」

ルフィが言った後にナミがローグタウンについて教えてくれた。

そして各々買い物があるようでウソップは装備集めに、サンジは食料の補充と・・・ナンパもするらしい。

ゾロはナミにお金を借りて新しい刀を買うようだ。利子は3倍なのはかわいそうだったが・・・。

「あ、ナミ・・・実は俺も買いたい物があるんだけど・・・」

俺はゾロとナミの会話を聞いていたので利子のことも考えたが、生活に最低限必要な物は揃えたかった。

「シンならいくらでも貸してあげるわよ？というより返さなくてもいいわ！」

「！！」

それを聞いたゾロはナミに猛抗議したが、ナミは考えを変えなかった。

そっか・・・・６個目の・・・・。

俺はあることを思い出し、ナミのその言動にも納得した。

もちろん、ナミの故郷を救ったお礼なのかもしれないが・・・・。

そしてルフィは、特に買い物はないので処刑台に行くらしい。

結局全員がバラバラの行動をすることになった。

バンッ！

「スモーカー大佐！大変であります！！」

ローグタウンにある海軍基地であの海兵がそう言いながら部屋の扉を開けた。

部屋の中は煙で真っ白になっている。

その部屋の中にスモーカー大佐という人物がおそらくいるのだろうが、煙でよく見えない。

「本部より連絡です。モンキー・Ｄ・ルフィ率いる海賊の一味がこのローグタウンに向かったと情報がありました。
東の海（イーストブルー）の３０００万と２７００万の賞金首が出た海賊たちです！」

海兵がそう言うと、中にいたスモーカーが口を開く。

「３０００万と２７００万・・・こりゃ～めでてぇこった」

「首領・クリークや魚人アーロンすら倒した凶悪極まりない悪党です！」

「静かにしろ！！」

海兵がそう付け足すが、スモーカーに一喝された。

ガラガラガラ・・・・・。

スモーカーはどうやら石積みのようなことをしていたようだ。しかしその石が崩れてしまった。

「あぁ・・・・」

そう言いながらスモーカーは立ち上がる。

「でけぇ声出しやがって！壊れちまったじゃねーか」

その石が壊れたのを海兵のせいにするスモーカー。
そう言われた海兵は律儀に「すみません」と言う。

「ダメだな・・・ 気がはっちまってよ。俺には俺のペースがある・・

・そうだろ？」

「は、はい」

そしてスモーカーは窓を開けて部屋中に広がっていた煙を外に逃がした。

「で？なんだって？」

ふぅ・・・。

とりあえず生活に必要な物は揃ったな。

俺はある程度の買い物を済ませて、これからどうしようか考えた。

本当は誰かに同行して見たかったこともあるんだけど・・・・。
ゾロの武器屋での行動とかさ。
まだ雨は降ってないから事件は起きないだろうし・・・。

とりあえず俺は近くにあったベンチに座った。

ココヤシ村でのことでわかったことがある。
まず、原作キャラを倒すことで他の漫画のスキルを神様から貰うことができる。

ただしモブキャラではダメ・・・ 最低でも原作で重要なキャラ付けがされているキャラじゃないとダメだということはアーロン一味で確認出来た。

そして貰えるスキルはランダムに決められる。

これが厄介なんだよなぁ～・・・。

今あるスキルでも十分だけど、あと一つ欲しいスキルがある。

それは身体的な力だ！

いくら大嘘憑(オールフィクション)きで死なないからといっても、基本的な戦闘力は欲しい。
最低でもこの世界のモブキャラぐらいは動きたい。

アーロンの時もそうだったけど、せめて相手の攻撃を避けられるぐらいのスピードは身につけたいな・・・。

今あるスキルは7つ。
その内使えるのは最初に貰った3つだけか・・・。

『はねる』もジャンプ力が上がるわけでもない・・・ただ本当に文字通りはねるだけの力だったしなぁ～。

あ。

シンの目の前にはあのスモーカーの姿があった。
どうやら女の子にアイスをつけられるあのシーンのようだ。
やっぱりスモーカーは優しいな。
俺はそんなことを思いながら、その光景を見ていた。

黒瀬新一（くろせしんいち）。２１歳。

身長１７２ｃｍ

体重５５ｋｇ

容姿

黒髪で瞳の色も黒の日本人。
顔は上の中ぐらいのかっこよさ。

性格

優しく冷静沈着でおおらかなＯ型。しかしキレたら物凄く怖い一面も持つ。

能力

人並以上の運動神経とずば抜けた動体視力の持ち主。
誰にも気付かれないほどのポーカーフェイスが出来る。
神様から与えられた能力は【大嘘憑き（オールフィクション）】、【千本桜】、【邪眼】の三つ。

麦わらの一味での役割は不明。

【大嘘憑き（オールフィクション）】

現実（すべて）を虚構（なかったこと）にするスキル。傷を負った現実そのものを「なかったこ

と」にして傷を負う以前の状態に戻したり、自分や他者の死、視力等の五感さえも「なかったこと」にできる（因果律に関与するスキルの為、自身の死に対しては自動で能力が発動し、死にたくても死ねない状態）。
神様から最初に貰った三つのうちの一つ。

【千本桜】

能力解放と共に刀身部分が目に見えないほどの無数の刃に枝分かれし、対象を斬り刻む。この刀身に光が当たることで桜の花弁を思わせるように見える。だが一方で、解放中は刀身が消えてしまうため、斬魄刀を通常の「刀」として使う事が出来なくなり、防御が手薄になるなどリスクも生じる。そのため力のある相手と接近戦を行う場合などには、あえて解放を行なわず「刀」のまま剣技で戦うことも多い。

解号は「散れ『千本桜』（ちれ『～』）」。卍解時にも唱えることがある。
神様から最初に貰った三つのうちの一つ。

【邪眼】

相手に1分間の幻影を見せる。複数人、動物にかける事も可能。24時間以内に3回まで、同じ人間に1度しか通用しないという制限が有り（瞬きをしなければ同時に複数人にかける事も可）、この禁を破ると世界から消滅し他者の記憶からも完全に消滅する。
神様から最初に貰った三つのうちの一つ。

【はねる】

はねるだけで何も起こらない。ポケモンシリーズ最弱の技。
アーロン一味の幹部のハチを倒したことで神様から貰った四つ目の力。

【どんな物・場所でもあらゆるアングルから資料なしで描けるスキル】

漫画『バクマン。』に登場する中井巧朗（なかいたくろう）の漫画を描くためのスキル。
アーロン一味の幹部のクロオビを倒したことで神様から貰った五つ目の力。

【ハーレム体質】

漫画『Ｔｏ　ＬＯＶＥる』に登場する結城（ゆうきりと）　梨斗が持つ魅力がスキルとなってシンに与えられた。
アーロン一味の幹部のチュウを倒したことで神様から貰った六つ目の力。

【天性の歌声】

漫画『ＢＥＣＫ』に登場する田中幸雄（たなかゆきお）の世界の著名なミュージシャンも一聴でうならせる才能をスキル化して神様から与えられた。
アーロンを倒したことで神様から貰った七つ目の力。

## 海軍大佐スモーカー（後書き）

今回は本編が短くなってしまってすみません。泣

あ、いろんな感想をいただきました！！

ありがとうございます♪

意外にも『はねる』についていろんな方から指摘を受けまして・・・。

ちょっとネタバレになってしまうかもですが、一つだけみなさんに言っておきます！

え～神様から貰った力はたとえどんな力でも必ず一回は活躍します。

とだけ言っておきましょう・・・・。

なので今回、２回目のシンのプロフィールを載せました！

また力が増えた時に新しいプロフィールを載せたいと思います！！

「悪いな、俺のズボンがアイス食っちまった。今度は5段を買うといい」

スモーカーはそう言って女の子にお金を渡した。

ん？

俺・・・か？

スモーカーがお金を渡して立ち去るのかと思いきや、こちらを見て少し驚いた表情をしている。

あぁ、そういえば俺は賞金首だったんだっけ？

俺はそんなことを考えながら逃げる準備をする。

「スモーカー大佐、あいつが先ほど言いました麦わらの一味の一人ですよ！」

スモーカーの後ろにいた海兵が言う。

「麦わらの一味だと！？」

それを聞いたスモーカーは驚きの声を上げる。

「はい、懸賞金２７００万ベリー！道化師のクロセ・シンイチです」

後ろの海兵がなんか言ってるようだが、今はそんなことどうでもいい。

俺は焦っていた。

今の俺ではスモーカーに勝てないことぐらいはわかっている。

覇気が使えない俺では、例え千本桜を使いこなしていても自然系（ロギア）には攻撃を与えられない。

だから逃げるしか選択肢はないんだが・・・・・・。

チッ・・・。

なかなかスモーカーと目が合わない。

普通に逃げてもすぐに捕まってしまう。だから俺はアイツに邪眼を使うしか逃げる方法がないのに・・・・。

シンがそんなことを考えていると、スモーカーはシンに近付いてきた。

「結局同じか・・・」

「!?」

スモーカーは小さい声でそんなことを言った。

結局同じ?どういうことだ??

ドッ!!

俺が疑問に思ったとほぼ同時にスモーカーに攻撃された。

クソッ！ホワイトブローか・・・・。

俺は壁に叩きつけられたが、すぐに大嘘憑（オールフィクション）きでダメージをなかったことにした。

散々練習してきたんだ。

百発百中だぜ！！

スッ・・・。

俺は千本桜を難なく抜ききった。

ダメージが与えられないのは知ってるが、目くらまし程度にはなるだろうよ！

「散れ！千本桜！！」

解号とともに消える刀身。

その直後にスモーカーを切り刻んだ。

が、やはりダメージは与えられない。スモーカーは煙となる。

その瞬間に俺は逃げようと走り出そうとしたが目の前にはすでにスモーカーの姿があった。

「めんどくさい奴だ」

とっとと諦めやがれ！

俺はこの間にも表情を変えない。
あくまでもクールキャラでいたいんでな。

しかし本当にめんどくさい。
たとえ卍解しても今の状況は変わらないだろう。

俺はチラッと空を見た。

大分曇ってきたな・・・。
そろそろルフィはバギーに拘束されるだろう。

そう思った俺はスモーカーに「もう終わりにしようか」と言った。

「スモーカー大佐！」

その時、どこからか走ってきた別の海兵が「広場に麦わらのルフィが！」とスモーカーに報告に来た。

「放っておけ！」

「で、ですが・・・・・」

「俺に指図すんなって言ってんだ」

クソッ！
あくまで狙いは俺か・・・・。

でも・・・・。

俺はその海兵の報告を聞いてメリー号のある船着場に向かって走り出した。

「逃がさねぇ・・・・・・！！」

カアーーー。

スモーカーの行く手を阻むかのように現れるカラスの大群。

「なんだこいつら！」

さすがのスモーカーも一瞬の隙が出来て、俺は逃げることに成功した。

カラスが空にいてくれて助かった・・・。

これで一分間はスモーカーを敵だと認識してくれるはずだ。

俺は急いでメリー号まで走る。

ドドォオオオオン！！

そんな轟音が鳴り響いたと思ったら、ポツポツと雨が降ってきた。

はぁ・・・・はぁ・・・・。

メリー号にたどり着いた時には、もうウソップとナミが船に乗っていた。
地面にはモージが倒れている。
リッチーは・・・・・まだ卵を食べていることからそんなに2人が到着してから時間が経っていないのだろう。

とりあえず俺もメリーに乗り込み、3人を待つことにした。

それから数十分、やっとルフィたちが帰ってきたので急いで船を出港させる。

それにしても凄い荒れようだな。

俺はナミの指示で、慣れない船の操作をする。
ルフィたちは帆に気を配ったりといろんなことをしていた。

「うっひゃー船がひっくり返りそうだ！」

なかなかに大変な状況なのだが、ルフィの声を聞くとなんだか安心する。

やっぱり船長なんだな。

俺がそんなことを思っていると、ナミが何かに気付いたようだ。

「あの光を見て！」

ナミの言葉に、全員が同じ方角を見る。

「島の灯台か？」

マストに掴っていたウソップがナミにそう尋ねる。

「導きの灯。あの光の先に偉大(グランドライン)なる航路の入口がある」

「あの先に偉大(グランドライン)なる航路が・・・」

ナミの言葉に、ルフィが呟く。

「どうする？」

そりゃ～もちろん。

「行くよな？ルフィ」

ナミと俺でルフィに尋ねる。
ウソップはビビッていたみたいだが、ゾロとサンジも行く気満々みたいだ。

和むぜ、ウソップ。

みんなの意思が固まったところで、サンジが樽を運んできた。
どうやら進水式をやるらしい。

あ、忘れてた！

夢・・・・・・。

俺の夢・・・・・・。

シンが悩んでいるうちにみんなは樽に足を乗せて夢を語り出す。

「俺はオールブルーを見つけるために」

「俺は海賊王！！！」

「俺ァ大剣豪に」

「私は世界地図を描くため！！」

「俺は・・・・・世界を見るため！！」

とりあえずウソップよりは早くと思ってこう言った。

悪くないだろ？

みんなは一瞬固まって俺を見たが、すぐに笑みをこぼした。

「お・・・お・・・・・・俺は勇敢なる海の戦士になるためだ！！！」

そしてすぐにウソップも自分の夢を語る。

少しの静寂が辺りを包み、風と波の音だけになるが、

「いくぞ！偉大なる航路（グランドライン）！！」

「「「「「おぉ！！」」」」」

## 狙われた道化師！夢を語る嵐の船出（後書き）

ローグタウンで見たかったなぁ～・・・。

ルフィの「俺は海賊王になる男だーーー！！」

そして早くも偉大なる航路（グランドライン）ですよー♪

次回は会えるでしょうか・・・ラブーンに！笑

## 運命の分かれ道？赤い大陸を乗り越えろ！！

進水式も終わり、俺たちは嵐が続くなか偉大なる航路（グランドライン）を目指していた。

現在はナミがしっかりと進路の確認を欠かさずにしてくれているので、俺たちは休憩を取りながら今後のことを話そうとしていた。

「そういえばシンは世界を見たいって言ってたけど．．．」

そう言ったのはウソップだった。

「あぁ、偉大なる航路（グランドライン）にあるいろんな島や人、生き物や現象を見てみたい。もちろん．．．．．みんなの夢の果てもな」

俺は素直にそう答えた。

それを聞いたルフィが「シッシッシ」と笑い出す。

「シンは、やっぱ副船長に決定だな！」

ルフィが唐突にそんなことを言い出した。
周りのみんなも驚いた表情をしている。
「おれ、初めてシンに会った時から決めてたんだ！！」
「え．．．．いいのか？」
俺は確認するように言葉を発した。
「船長命令だからな」
「その代わりしっかり頼むぜ？副船長」
「嫌ならいつでも代わってやるからな！」
「もちろん私は構わないわ！」
ゾロ、サンジ、ウソップ、ナミも了承してくれた。
俺が麦わらの一味の副船長か～。
こりゃ～本当にしっかりしないとな。

シンの副船長昇格の話が終わったところで、ナミはテーブルに海図を広げると口を開いた。

「一つ分かった事があるの。いい？“偉大なる航路（グランドライン）”の入口は山よ」

「「「「「山！？」」」」」

いきなりの突拍子もない言葉にみんなは首を傾げる。

しかし、どうやらナミは本気のようで海図を指指して説明を始めた。

俺はもちろん知っていたが、驚いたふりをしてみんなに合わせる。

「導きの灯が差してたのは間違いなく此処・・・・・赤い土（レッドライン）の大陸にあるリヴァース・マウンテン」

「何だ、山へぶつかれってのか？」

「違うわよ。ここに運河があるでしょ」

ゾロが疑問をぶつけると、ナミはすぐにそれを否定した。

ゾロとウソップはまだ、ナミの言う事を信じていないが、ルフィはなんだか楽しそうだ。

「そもそも、何で態々“入口”へ向かう必要があるんだ。南へ下れば、どこからでも入れるんじゃねェのか？」

「それは違うぞお前っ！！」

「そう、ちゃんと訳があんのよ」

「入口から入った方が気持ちいいだろうが！！！」

「違うっ！！」

そんな原作と同じ会話を俺は特に参加もせずに聞いている。

この感じ・・・・・・やっぱり和むわぁ～。

俺がそんなことを思っていると、急に外が静かになった。

「しまった・・・・“凪の帯（カームベルト）”に入っちゃった・・・・」

外を見たナミが半泣き状態で言う。

そうか・・・・・凪の帯（カームベルト）のことをすっかり忘れたよ。

「ちょっとあんた達、早く帆を畳んで船を漕いで！嵐の軌道に戻るのよ！！！」

ナミが怒るように指示している。

サンジだけは笑顔で頷いたけど、他の面々はイマイチ事情が分かっていない様子だ。

帆船なのにどうして漕ぐのか、何故態々嵐の中に戻るのかと、しきりに首を傾げている。

すると、不意に地震かと思えるような大きな揺れがメリー号を襲った。

全員が外に出ると、メリー号は海王類の額に乗っていて、下を覗き込めば多くの海王類に囲まれていた。

「い・・・・ いいな、兎に角・・・！！こいつが海へ帰っていく瞬間に思いっきり漕ぐんだ！！」

俺たちは大きなオールを担ぎ、ジッとその時を待つ。

が、そう簡単に終わらせてくれないらしい。海王類は急に顔を傾け、大きなくしゃみをしたからだ。

当然、海王類の上にいたメリー号は凄い勢いで飛ばされる事となった。嵐の方に向けて飛ばされた事だけが、唯一の救いだ。

途中、ウソップが巨大な蛙に食べられそうになったりしながら、何とか嵐の中に戻ってきた。

俺はその時の疲れを大嘘憑(オールフィクション)きで無かったことにしたため元気だが、ほかのみんなはひどく疲れている。

「あ、分かったわ・・・・・ やっぱり山を登るのよ」

そんな中で不意にナミは言い、海流の影響だと説明した。

四つの海の大きな海流が全てあの山に向かっているとしたら、四つの海流は運河を駆け上って頂上でぶつかり、偉大(グランドライン)なる航路へと流れ出る。

この船はもう海流に乗っているから、あとは舵次第という訳だ。

「リヴァース・マウンテンは“冬島”だから、ぶつかった海流は表

層から深層へ潜る。誤って運河に入り損なえば船は大破・・・・海の藻屑ってわけ。分かる？」

まだ疲れが残っているみんなに対してナミは言う。

俺は海の仕組みとかは良く分からないが、海流に乗った勢いのままリヴァース・マウンテンに衝突しかねないという事だろう。

ルフィは“不思議山”の一言で片付けていたけれど、そう考えるとかなり重要な話だ。

一歩間違えれば、夢を叶える事もなく命を落す事になるのだから。

それから間も無く赤い大陸（レッドライン）が姿を見せた。

視界の先には、海が山を登る後継が広がり、一同はその凄まじさに目を瞠る。

ここが運河の入口か・・・少しでも位置がずれれば、船ごと海の藻屑となる恐怖の場所。

ウソップとサンジが二人がかりで舵をきり、向きを定めていく。

が、そこでまたハプニングが発生した。力を入れすぎたのが原因か、命綱である舵が折れたのだ。

ルフィがその能力を駆使して無理やりに船を方向転換してくれたの

で、何とか無事山を登り始めたが、もうこのまま死ぬのではないかと本気で思ったのは言うまでもない。

そして、メリー号が運河を登りきって下り始めた。

「おお見えたぞ“偉大なる航路(グランドライン)”！！！！」

ルフィが大きな声で言う。

さぁ、ここからが俺の冒険の始まりだ。

俺は期待を胸に膨らませ、船の前方をみんなと一緒に見る。

しかしここから、原作とは少し違うＯＮＥ　ＰＩＥＣＥをシンは見ることになるのだった。

## 運命の分かれ道？赤い大陸を乗り越えろ！！（後書き）

さてさて、ここからがこの小説の本番！笑

今まで以上に気合を入れて書いていきたいと思います！！

## 見られない決闘？ラブーン出港への咆哮

――――ブオオオオオオ．．．．．！！！

偉大なる航路（グランドライン）に入った俺たち麦わらの一味は双子岬に向けて船を走らせていた。

風の音に紛れてラブーンの声が聞こえる。

ほかのみんなはこの声を気にしているが、俺はおもしろそうなのでそのまま黙っていた。

と、メインマストに登っていたウソップとサンジが、行く手を遮る山を発見した。

この先の“双子岬”を越えたら海しかない筈なのにとナミが言う。

「もしかして・・・・・その“山”が鳴き声の主？」

続けてナミが気がついたように言った。

数秒後・・・・・残念ながら、予想が当たっている事が判明した。
大きな鳴き声をあげ、山のように行く手を遮っていたのは信じられないほどの大きいクジラだったのだ。

「ちょっと待て、ここまで近付くと、ただの壁だ！！！まず目はどこだよ！！」

「体の両側・・・・じゃない？ってことは、向こうは私たちに気付いてないのかな？」

「気付いて邪魔しに来た訳じゃなくて、偶然出てきた所だった、って事？」

本当の所など分からないけれど、襲ってくる様子もないので、多分気付いていないのだろう。
これだけ大きな体をしていると、その目で見える範囲も限られているのかも知れない。

どちらにせよ、このままだと衝突して船が大破しそうなので、危機的状況に変わりはないのだが。

「おい、良く見りゃ左が少し空いてる！とり舵だ！！」

「舵折れてるよ！！！」

「何とかしろよ、俺も手伝う！！！」

折れた舵で何処まで出来るか分からないが、何もしないまま終わるよりマシだ。
ゾロ・サンジ・ウソップの三人がかりで精一杯舵をきり、何とか船体を曲げようとするがどんなに強く引いても上手くはいかず、クジラはもう目の前まで迫っている。

が、不意にクジラ目掛けて大砲が放たれ、船は緩やかに動きを止めた。

それでも、クジラにぶつかってしまったので、ルフィの特等席であるメリーの船首が折れてしまったし、態々相手に自分たちの存在を気付かせる事になってしまったしで、とても“良い”とは言えないが。

まぁ、俺の大嘘憑き（オールフィクション）で治してあげてもいいけど・・・。
フランキーやサニーのことを考えるとやらないほうが良いのだろう。
それに、メリーとの冒険もなかったことになってしまうんじゃないかと俺は考えた。
まだ俺はメリーとの冒険は少ないが、なんとなく嫌だった。

俺がそんなことを考えている間に、一同はゴクリと息を呑み、ラブーンの出方を伺っているようだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・に、逃げろ今の内だァ！！！」

砲撃に気付いていないのか、または単にトロイのか、ラブーンは全く動かない。
という訳で、先ほど舵をきっていた三人で、オールを使い、ラブーンの左側を通り抜ける。
気付いているのか否か、劈くような鳴き声がその場に響き渡った。
それでも襲われている訳ではないので、セーフだろうか・・・とり

あえずラブーンから離れようということで、努力する三人を他所に大砲を撃った張本人ルフィが現れて言った。

「お前一体俺の特等席に・・・・・・何してくれてんだァ！！！！」

何とルフィはその腕を伸ばし、近くに見えたラブーンの眼球を殴りつけたのだ。
ぶつかったのは此方なのだから、ラブーンが意図して特等席を壊した訳ではない上に、今まで“これでも”無事で済んでいた中での暴挙に、全員が声を揃える。

「「「「「「「アホ――――っ！！！」」」」」」」

ついにラブーンの視線がメリー号を向いた・・・今、気付いたのだろうか。
対しかかって来いと構えるルフィの後頭部を、ゾロとウソップが二人で蹴り飛ばす。

次の瞬間、ラブーンは大きな口を開いて海水ごとメリー号を飲み込み始めた。

当然、逆らう術もなく、クジラの中へと吸い込まれていく。
そんな中で、ルフィだけが船からはじき出されてしまったが、持ち前の能力で何とかなる・・・・・だろうか。

「「「「「「うわあああああ」」」」」」

残念ながら、人の事を心配しているだけの余裕は、無かった。
知っていた展開とはいえ、やはり何かに食べられるというのは嫌なものだ。

ガンッ!!

ん？

「あ、気がついた？」

ナミ・・・・？

俺どうしたんだっけ？

俺は体を起こして周りを見てみる。
ラブーンにはもうルフィが描いた約束の証がある。

「アンタ、ずっと気絶してたのよ？」

まだ理解していない俺にナミが優しく言ってくれた。

うわ・・・・・かっこわりぃ～。

どうやらもう双子岬を出港するようで、ビビたちも船に乗っていた。
そのビビは何故か俺の顔をまじまじと見ている。

「アナタ・・・・・どこかで私と会ったかしら？」

今はミス・ウェンズデーと名乗っているはずだが、この言い方は完璧にビビだ。

とりあえず俺は、まだこの世界で会ったことは無いので「いや、初めて会うけど」と言った。

ビビは「・・・そう・・・」と言って甲板の方に向かう。

そんなこともありながらも、ゴーイングメリー号は双子岬を出港する。

ラブーンは大きな声で俺たちを見送ってくれた。

必ずブルックを連れて来るからな。

クロッカスさんとは話せなかったが、ウイスキーピークに向けて船を進める。

## 見られない決闘？ラブーン出港への咆哮（後書き）

次はウイスキーピークですね！！

ルフィＶＳゾロは実現するのでしょうか？

そして今回空気だったシンはどんな行動をするのか。

お楽しみに～♪

## 賞金稼ぎの巣？月夜に舞う千本桜

俺たちは今、偉大なる航路（グランドライン）の一本目の航海を終えてウイスキーピークに上陸した。

島に着く前にビビ・・・・・もといミス・ウェンズデーとＭｒ．９は船を飛び出していったが・・・・。

まぁ、この島のどこかにいるんだろうけど・・・・・。

島に上陸してすぐに宴会が始まった。

ちなみに俺も参加はしたが、あまり酒は飲まずに酔いつぶれたふりをして倒れる。

宴会好きなルフィに怒られたくはないからな。

俺はあまり口を挟むのを好まない。

忠実な原作を生で見れるのだから当然だろう。

アーロンを一人で倒したのはノジコに恩返しがしたかったからだ。

もちろん、ルフィに会うために海に出たかったから・・・というのも理由の一つではあるが・・・・。

俺もずいぶんとＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの世界に慣れてきた。

というより最初の敵がアーロンだったから、普通の人間にはあまり

恐怖を感じない。

だからこそ俺は寝たふりまでして自分の力を試したかったんだが・・・。

一味全員が寝て、島の人間が一時的にこの建物からいなくなった。

俺はゆっくりと目を開けて見るが、すでにゾロの姿がない。

しまった！

先を越された。

「見ろ奴らの懸賞金だ」

イガラム・・・・もといイガラッポイが手配書を出す。

「３０００万と２７００万！？」

「きっと何かの間違いだ！」

「そうだ！あんな弱そうな奴らが・・・・」

そんな声が聞こえてきたので、俺はこっそりと外に出る。

ん～。

屋根の上に上がるのはすごくめんどくさい。

でも、やっぱりかっこよく登場したいじゃん？

「なぁ、悪ぃんだがな・・・」

「！！！」

いやいやちょっとゾローーー！！

まだ早いって！

俺の思いも虚しく、ゾロは続けている。

「あいつらを寝かせといてやってくんねぇか？昼間の航海でみんな疲れてんだ」

カッコイイーーーーーーー！！

ゾロ、アンタは物凄くかっこいいよ！

でも待って・・・・・・もうちょっとだからさ！！

はぁ・・・はぁ・・・・。

やっと登れた！

「剣士たるもの酒に呑まれるようなバカは、やらねぇもんさ」

ゾロがかっこよくキメている。

「つまりこういうことだろ？」

俺もゾロに続いて大きめの声で言った。

「シン！？お前・・・起きてたのか？」

ゾロが驚いたように俺を見て言う。

俺はゾロのちょうど正面になる建物の屋上にいる。

賞金稼ぎ・・・・バロックワークスたちを挟むような陣形だ。

「俺も気付いてたぜ？バロックワークス」

俺がそう口に出すと、賞金稼ぎたちの目の色が変わる。

「へぇ～」

ゾロは俺を関心している。

「シン・・・ お前が戦うのは初めて見るなぁ」

「俺もだよ・・・・・ゾロ！」

二人は遠い位置にいながらも雰囲気で声を合わせる。

「「相手になるぜ！バロックワークス！！」」

ゾロはその言葉とともに姿を消す。

うわ～ずるい・・・・・。

俺もゾロみたいにかっこよく下に降りたいけど・・・・・。

絶対俺が飛び降りたらドーーーーーン！！ってなるよ。

大嘘憑(オールフィクション)きで無傷だとしても、ドーーーーーン！！はなんかかっこ悪い・・・・・。

仕方なく俺はその場で千本桜を解放する。

「散れ！千本桜！！」

ギャアアアア！！！

千本桜の刃によって、何十人もの賞金稼ぎが吹っ飛んでいく。

ゾロはゾロで何十人も吹っ飛ばしている。

（なんなんだアイツの刀？）

ゾロはシンの刀を気にしながらも戦い続けている。

げ！！

俺は恐くて・・・・・・じゃないじゃない・・・接近戦が苦手な俺の後ろには数人の賞金稼ぎたちが！

いつの間に上ってきたんだ？

俺は突然のことに焦りながらも、千本桜を戻して対処した。

ふぅ～。

気がついて良かったぜ。

そんな危機も多少ありながらも俺とゾロは賞金稼ぎたちをぶっ飛ばした。

「やっと静かな良い夜になったな」

「あぁ・・・・」

チンッ・・・・。

俺とゾロは静かになったウイスキーピークで酒を飲み交わす。

「それにしてもお前の刀はなんなんだ？」

あ～・・・・やっぱり聞いてきたか・・・・。

俺は少し困ったが、ゾロということで簡単に誤魔化せた。

「なんだ、不思議な刀か！」

「あぁ、俺も初めて見た時は驚いたよ」

「はっはっはっは」と二人で笑い合う。

さて・・・・そろそろかな？

ドーーーーン！！

静かになったウイスキーピークに響く轟音。

Ｍｒ．５とミス・バレンタインがこの島に到着したようだ。

もう一仕事するか！！

俺はあることを忘れて爆発があった場所にゾロと向かった。

## 賞金稼ぎの巣？月夜に舞う千本桜（後書き）

なんかタイトル負けしているような内容になってしまった。泣

それでもおもしろいと思って見てくれている方々・・・ありがとうございます！！

## 王女を届けろ！！麦わらの一味三つ巴の攻防

「お二方！貴殿たちの力を見込んで、理不尽な願い申し立てまつる！」

イガラムがゾロの足を掴んでそう言った。

あれから俺とゾロは爆発のあった場所に到着し、ルフィを救出した。
どうやらＭｒ．５とミス・バレンタインがビビを追ってここに来て、イガラムたちはビビを守るために二人にやられたようだった。

その時、イガラムがゾロの足を掴んだというわけだ。

ゾロは掴まれた足を振りほどこうと必死になっている。
その間にビビはカルーに乗ってどこかに逃げてしまった。
Ｍｒ．５とミス・バレンタインも逃げたビビを追いかけて行ってしまう。

イガラムはどうしても俺たち二人に頼みたいらしく、ビビをアラバスタまで届けると莫大な恩賞を約束するとまで言っている。

あ～ぁ、そんなこと言っていいのか？

「莫大な恩賞って本当？」

俺がそう思っていると、ナミが現れて言った。

やっぱり・・・・。

ここからナミの交渉が始まった。
１０億ベリーで了承すると言っている。

原作通り・・・・・。
でも結局貰えなかったのだから、この交渉にさほど意味はない。

結局ゾロがローグタウンでナミに借りたお金の利子をチャラにするという条件で、ゾロは納得した。

が、俺もナミにお金を借りているのをゾロは見ているので、そのことで激しくナミと揉めていた。
しかしナミは「シンにはお金を貸したんじゃなくてあげたの！」と言ってくれたので、俺はなんとか逃れられた。

ゾロがビビを助けに行ってから少し経ち、俺とナミはイガラムからアラバスタについてなどを聞かされている。

ん？

ルフィがいない・・・・・。

あ！！

俺はすっかりこの展開を忘れていた。
ルフィの勘違いでゾロとルフィが戦うことを・・・・。

俺はナミに、ゾロの帰りが遅いから様子を見てくると言ってその場を離れた。

やっぱこのシーンは見逃せないよな！
俺はかなりウキウキしながら現場に到着する。

「「ごちゃごちゃうるせぇな！！」」

あれ？
もしかしてもう終わっちゃう？

「「勝負の・・・・・邪魔だぁぁぁあああ！！」」

うわーーーー、全然見れなかったーーー！！
俺は早く来れば良かったと激しく後悔した。

「ウザってぇ・・・・」

「何だあいつら・・・」

Ｍｒ．５とミス・バレンタインをぶっ飛ばしても、まだ怒りが収まらない様子のゾロとルフィ。
その二人の先にはビビとカルーがいる。

「さてと・・・・決着(ケリ)つけるか！」

「おう！！」

二人は睨み合い、そして構える。

確か、この後すぐにナミが来てこのケンカを終わらせるんだったな・・・。

俺はそんなことを思いながら、この話の結末を見ていた。

「「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉりゃーーーーー！！」」

ドゴーーーーーーン！！

「！！？」

え？

ルフィとゾロの掛け声から数分・・・・・いや、まだ数秒か。

ナミは現れず、ルフィとゾロはまだ戦っている。

ど、どういうことだ？

こんな展開は原作でもアニメでもなかったはず・・・・・・・・・！！

もしかして俺がナミに様子を見てくると言ったから、ナミは安心して俺に任せてくれたのだろうか？

ってことはこのケンカ・・・・俺が止めなくちゃならないのか？？

ん～・・・・・・無理！！

そんなことを考えてもまだナミは現れず、二人は怪我を増やしていく。

このままでは、本当にどっちかが死ぬまでやりかねない。

そう考えた俺は二人を止めるために間に入った。

「なんだシン・・・・」

「邪魔する気か??」

二人の目が異常に恐い・・・・。

「もう止めとけ!目的は果たしてるだろ?」

俺はそう言ったが、二人は聞く耳も持たずに「そういえばお前もこの島の人を斬ったんだってな!!」とか言って、ルフィが俺にも攻撃してきた。

どんだけ怒ってんだよ!

そりゃ〜斬ったけどさ・・・・・。

ゴッ!!

痛ってぇーーー!

ルフィの拳が俺の顔面に当たる!

クッソ・・・・。
いくら無かったことにしても痛いのは痛いんだからな！
頭に血が上ってしまった俺は、本来の目的を忘れて千本桜を抜いた。
「散れ！！」
スパッ！
「！！」
俺の解号が言い終わる前に、ゾロが俺の腕を斬り付けてきた。
痛ってぇ・・・・。
「いい機会だ・・・・お前に副船長が務まるのか、試してやるよ」
そのゾロの言葉で、俺には味方がいないのだと悟った。
クッソ・・・・。

こうなったら俺もやれるとこまでやってやる！！

完全に頭に血が上り、ルフィ、ゾロ、シンの三つ巴の戦いが始まった。

「ゴムゴムのぉぉぉおおお・・・」

「三刀流・・・・・」

「散れ・・・・」

三人が同じような距離に立っていたので、ほぼ同時に技をだそうとする。

シンにとっては、この三つ巴が良い結果になった。

一対一では解号をするにも大変だっただろう。それはさっきのゾロからの攻撃でわかった。

だが、今は三人がほかの二人を警戒して同時攻撃に意識がいっている。

結果、シンは簡単に解号することが出来た。

「バズーーーーカぁぁぁぁぁ！！」

「鬼斬りいいいいいいい！！」

「千本桜ぁぁぁぁぁ！！」

ドーーーーーーーンッ！！！

三人の技の衝撃波で周りの建物が崩壊する。

幸いビビはギリギリのところにいて、この衝撃波を受けずにすんだ。

「なんて人たちなの・・・・。強すぎる！！」

シンたちの戦いを見て呟くビビ。

それぞれ違う建物に吹っ飛んだ俺たちは同時に瓦礫から出てくる。

ルフィとゾロは血だらけだ。

それもそうだろう。シンが来る前から二人は戦っていた。

しかしシンも服はボロボロになっていた。
大嘘憑(オールフィクション)きで痛みは無かったことにしたものの、服にかける時間は無いと判断したのか、無かったことにせずにまた千本桜で二人に立ち向かって行く。

同じようなことを何回か繰り返して戦う三人だったが、時が経つにつれてルフィとゾロが千本桜を完璧にかわすようになってしまった。
動物の勘というやつだろうか・・・・ほとんど刃が見えないはずだが、シンの攻撃を察知するとその場から離れてしまう。

シンはシンでまだ完璧に千本桜を扱えきれてはいないのだろう。
手で操作は出来るようになったが、攻撃が単調すぎるし、ルフィとゾロのスピードについてはいけなかった。

周りから見ればこの三人は互角に見えるだろうが、実際にはシンの攻撃はこの二人にダメージを与えられずに二人の攻撃ばかりくらっている。
互角に見えるのは、シンが大嘘憑(オールフィクション)きでダメージを無かったことにしているからで、ルフィとゾロにとってはただの不死身な奴くらいにしか思われていないだろう。

徐々にこの戦いは、ルフィＶＳゾロの形になっていく。

（やるしかない・・・か）

ルフィとゾロが二人で戦っているのはほんの数秒だが、シンは見ている形になった。

その少しの時間で、シンは目を閉じて刀に集中する。

いくぜ・・・・・・。

「卍・・・・・・解!!」

刀を切っ先から地面に落とすと、まるで地面に飲み込まれるかのように千本桜が消える。

ルフィとゾロも何かを察知したのか、一瞬シンに視線が奪われる。ただ立っているだけに見えたシンの両サイドから千の刀身が浮かび上がった。

「な、なんだありゃ・・・・」

「刀が・・・」

ルフィとゾロは驚きを隠せない。

「卍解・・・千本桜景厳（せんぼんざくらかげよし）」

シンがそう言った直後、千の刀身が一斉に舞い散った。

さすがにやばいと思ったのか、ルフィとゾロはそれらの刃をかわしながらシンに近付いてくる。

当然全てをかわしきれなかったのか、ルフィとゾロの腕や足に斬り傷がついていく。

だが、確実に近付いて来る二人の前にシンは数億枚の刃を盾にする。

そして、ルフィとゾロは・・・・・・。

「やめろーーーーー！！」という声とともに現れたナミによって殴られた。

ドサッ・・・・・・。

その声を聞いて、シンも卍解を解いて千本桜を鞘に収めた。

「あんたらねぇ～一体何やってんのよ！！シンもよ！」

俺は殴られずにすんだが、ナミに怒られてしまったので、素直に「すいません」と謝った。

結局それからは、ナミに怒られる意外は原作通りに進み、ビビをアラバスタまで届けることになった。

俺はお詫びとして、自らサンジとウソップを起こしに行ったのでアンラッキーズにも見つからず、バロックワークスに顔を知られることはなかった。

そういえば、あれからゾロは何も言ってこないけど、俺を副船長として認めてくれたんだろうか？

言ってこないってことはきっと認めてくれたんだろ！

俺はそんな適当な結論を出して、考えるのをやめた。

## 王女を届けろ！！麦わらの一味三つ巴の攻防（後書き）

正直・・・この三人の戦いはもっと書きたかったですね。

でもたぶんやばいぐらい長くなってしまうのでは？と思ってこういう結末にしました。

いや～本当にこの戦いは書いてて楽しくてねぇ～。

リトルガーデンやそれ以降の話は決まっているものの、もっとこういった話を書きたいと思ってしまいましたよ！

そんなこんなでウイスキーピーク編終了いたしました！！笑

次回からのリトルガーデン編もお楽しみに～♪

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0864z/

---

ONE PIECE~最強の転生者

2011年12月11日16時51分発行